

人工知能：われわれ人間は賢くなった

コンピュータとどう付き合っていくべきか

日時：平成29年2月11日（土） 14:00 ~ 15:30

場所：池田商工会議所 2階会議室（C+D 会議室）

大阪府池田市城南1丁目1番1号

対象：一般、高校生以上

参加費：無料（ドリンク、お菓子をご用意しています）

定員：40名

〆切：2月5日（日）（ただし、定員になり次第締切り）

講師：公立ほこだて未来大学 教授 松原 仁 先生

（人工知能学会 前会長）

最近人工知能（AI）がブームになっています。囲碁では韓国のトップレベルのプロ棋士とコンピュータが戦ってコンピュータが勝利しました。車の自動運転の実験が進んで近い将来は人間が運転席にいなくても人工知能が代わりに運転してくれるようになると期待されています。またコンピュータの書いた小説が文学賞の一次審査を通過しています。人間の道具である人工知能が進歩をすると、人間の生活がよりよくなることが期待されます。その一方で、人工知能の進歩によって人間の仕事が奪われる、さらには人間の生活がコンピュータに脅かされる危険があるのではないかという懸念があります。

ここでは人工知能とはどういうものか、人工知能には何ができて何ができないのか、これからわれわれ人間は進歩した人工知能とどう付き合っていくべきか、を考えたいと思います。



清水市代女流王将 対「あから2010」（将棋ソフト）の対戦場面

スマホが鳴った。

深夜一時ころ。ここは研究室の中。

鈴木邦男は、先月ここに配属されたばかりであるが、平均帰宅時間はすでに深夜零時を超えている。

邦男は大きなあくびをしながら、ポケットの中からスマホを取り出した。

「鈴木邦男さんですか？」

「はい、あなたは？」

「わたしは悪魔」

「イタズラならよしてくれ。僕はいまレポートで忙しいんだ」

「なんでも一つ願いを叶えてみせましょう」

「バカバカしい、さあ、切りますよ」

「お待ちください、一度試してみても損はないでしょう？」

「それなら、このひどい眠気をなんとかしてくれ。レポートが進みやしない」

「お安い御用です」

悪魔がスマホ越しに何やら呪文を呟いたと思うと、邦男の眠気はさっぱりと消え飛んだ。レポートもぼっちり書けた。

しかしそれ以来、邦男は一睡もすることができなくなった。

松原先生のプロジェクトでコンピュータに書かせた小説の例

主催： 国立研究開発法人

産業技術総合研究所 関西センター

後援： 池田商工会議所

【詳細・申込み先】

<http://www.aist.go.jp/kansai/>

（このホームページから申し込んで下さい）

【問い合わせ先】

産業技術総合研究所関西センター

（大阪府池田市緑丘1-8-31）

産学官連携推進室

kansai-cafe-ml@aist.go.jp